

横光利一の〈長篇小説〉に関する研究

——一九三〇・四〇年代の〈日本〉をめぐるメディアとテキストの展開

本論文は、横光利一（一八九八―一九四七年）がその戦間期から戦中・戦後にかけて書き継いだ〈長篇小説〉群について、それらが連載された出版メディアの果たした機能に注目しながら、同時代のナシヨナリスティックな言説との関わりのなかで生成された〈日本〉をめぐる表象の分析を通じて、横光の一九三〇年代から四〇年代における文学的営為を再評価することを目的とするものである。

ここで言う〈長篇小説〉とは、長い作品を意味するものではない。一九二〇年代のジャーナリズムの拡大を象徴する円本や雑誌（総合雑誌や文芸雑誌）の発展の終息が叫ばれ始めた一九三〇年代、横光をはじめとする純文学系の作家たちはそれまで発表の舞台としてきた雑誌からの脱却を志向しはじめる。新聞や婦人雑誌といった大衆的な出版メディアが当時飛躍的な発展を遂げていたことを背景に、中・長期的な連載と最大多数の読者獲得の可能な新聞・婦人雑誌メディアへの進出が提唱されたのであった。そのとき彼らはその膨大な読者を想定して文学の大衆化という問題を提起し、新聞・婦人雑誌メディアを通じた〈民衆〉の存在を内面化していった。

この過程においては、読者を〈民衆〉という言葉のもとに規定していく作家たちの恣意性、主体性が確実に存在していたと考えられる。メディアを通じて見出されたものに過剰な意味づけが行われたのであり、その過剰な部分にこそやがて〈日本〉という枠組みを現前させる契機が介在していたのである。一見その流れは、戦後の否定的評価や従来の文学史が横光について説明してきた内容——日本回帰、伝統の発見、国粹主義への傾斜、等々——と同じように見えるかもしれない。しかし、彼らが構想していた創作の論理はそれほど単純ではなかった。彼らは同時代における日本主義⇄ファシズム的趨勢に極めて批判的なかたちで〈日本〉を語っていた。これは矛盾ではない。この時期、内実の異なる〈日本〉の表象が鼎立していたのである。その一つとして想起しやすいのは、保田與重郎らが提唱した「日本浪曼派」であろう。しかし、保田らの〈浪曼〉が志向した「イロニー」としての美学的な〈日本〉に必ずしも賛同せず、大衆的メディアとの相互的關係のなかで見出された〈民衆〉への接合を主題化し、「私」（私小説）を社会化させていくことで〈日本〉という広がりを獲得しようとした、もうひとつのロマン主義的な系譜があった。横光に代表されるこの系譜を、保田らの〈浪曼〉とは区別するため、本論では〈長篇〉と呼んでその内実を探求することにした。

一九三〇年代における〈長篇<sup>ロマン</sup>〉の登場は、別の言い方をすれば、大正期的な〈短篇<sup>ノベル</sup>〉の否定とそこからの転換を意味している。雑誌一号に掲載できる程度の分量の〈短篇〉を否定することは、新感覚派等において追求された「新しさ」が終わりを告げ、広津が新聞への進出を「陣地回復」と表現したように、明治期的な小説の在り方に立ち戻らうとする回帰の志向を表出させたと言える。しかし、表面的には回帰の位相に見えるこの時期の自己遡及（Ⅱ〈日本〉）の様式はけっして単一ではなく、また横光のように同じ作家でありながら時代とともにその内実を大きく転換していった例もある。文学には文学の〈日本〉が存立していたのであり、それが実践された〈長篇小説〉のテクストを局面ごとに分析することによって、その表象がファシズムⅡ日本主義によって全体化されることに批判的であった彼らの、〈日本〉をめぐる攻防の諸相が明らかになるものと思われる。

一九三〇年代をこのように〈長篇<sup>ロマン</sup>〉の時代として再解釈するとき、上述のような問題は同時代の作家に広く共有される問題であり、分析するべき作品は多岐にわたることが想定される。そこで本研究では、この〈長篇<sup>ロマン</sup>〉の機運において中心的存在であったと考えられる横光利一とその主要作品に論究を限定することにした。横光の「純粹小説論」とその実践が〈長篇<sup>ロマン</sup>〉の機運を決定づけたと言っても過言ではないためである。

以下に、本論の構成と各章の概要を述べる。

## ●第一部 一九三〇年代における新聞メディアの発展と〈長篇小説〉の成立

第一部では、本論文の主題である〈長篇小説〉が一九三〇年代において成立した歴史的過程を検証する。ここでは、特に一九三〇年代における新聞メディアの飛躍的な発展が横光の「純粹小説論」を中心とした同時代の文学論を動かし、作家たちをして〈長篇小説〉の製作へと志向せしめた実態を明らかにすると同時に、そのメディアを通じて見出された文学の受容者Ⅱ読者を〈民衆〉として規定していった作家たち自身の主体性を問題とする。ここにこそ、「日本的なもの」という流行言説のなかで彼らが彼ら自身の〈日本〉を表象することになる契機を見出すことができるのである。

「第一章 「純粹小説論」と一九三〇年代における〈長篇〉の成立——新聞・婦人雑誌メディアの発展とマルクス主義退潮期の〈民衆〉思想——」では、まず横光利一の「純粹小説論」とその同時代における〈長篇小説〉への意識を確認し、次にその〈長篇小説〉への意識が当時の新聞・婦人雑誌メディアの飛躍的發展によるものであることを社会的に辿った上で、その読者が〈民衆〉としてイメージされ思想化されるのと同時に、その〈民衆〉思想がマルクス主義の後退した時代における日本主義Ⅱファシズム的動向とは対立する性格のものであったことを検証する。メディアを通じて見出された作家たちの〈長篇<sup>ロマン</sup>〉が同時代のナショナリズムを無条件に再生産するものではなく、むしろそれに抵抗するものとして成立した実態を照らし出し、一九三〇年代の文学作品を再評価するための基盤を提示する。

「第二章 「家族会議」——新聞メディアの発展と〈長篇小説〉における〈民衆〉意識——」では、前章で確認した新聞メディアとその〈長篇小説〉における〈民衆〉思想の形成について、「家族会議」という実際の作品から具体的にその実態を考究する。純文学の危機意識に端を発して「文芸復興」が議論されたこの時期、新聞に発表の場を求める作家たちによって〈長篇小説〉制作に関する議論が相次いだ。「純粹小説論」も「長篇制作に関するノートを書きつけたやうな結果になった」とあるように長篇小説論なのであり、「家族会議」はその実践としての新聞小説に横光までもが進出したという点で話題とされていた。そして、新聞というメディアがもつ最大多数の読者に対する意識が作家たちのなかで規範化され、それを通じて「民衆」ないし「民族」という問題を設定しはじめるところに、この時期の文学における一つの傾向が見出されなければならない。「日本精神」および「日本的なもの」という文学的問題の系譜に、この〈長篇小説〉論議に潜伏する読者意識が少なからず与していると仮定できるのである。横光の「長篇小説（新聞小説）」論における「民衆の高級な精神」と、「家族会議」および後続の「厨房日記」や「旅愁」で描かれる「義理人情」の接点に着目し、一九三五年前後の新聞小説が一九三〇年代の〈日本〉をめぐる問題規制の同一線上に位置づけられる過程を探求する。

## ● 第二部 戦間期の〈長篇小説〉と〈日本〉言説の展開

第二部では、第一部で問題提起した内容——横光の〈長篇〉が、ファシズムⅡ日本主義に迎合するのではなくむしろこれに批判的であった一方で、保田らの「イロニー」としての〈浪漫〉とも性格を異にすることを、実際に〈長篇小説〉のテキストを精読することによって論証する。なお、横光の〈長篇小説〉は一九三七年の日中開戦を機に大きく変質していくため、本部ではそれに至る前の戦間期における主要な〈長篇小説〉を扱う。

「第一章 「上海」——言語都市〈上海〉とその〈日本〉をめぐる表象の歴史性——」では、その言語都市としての〈上海〉を通じた〈日本〉表象がそれぞれの歴史的局面とともに異なるコンテキストをもって生成されなおされた過程を明らかにする。本章は、第二部から第三部にかけての論考の見取り図を提示するとともに、その再生成が、『改造』や『文学クオタリイ』といった雑誌に掲載されるたびに、また改造社からの初版・再版のたびに行われたという、〈長篇小説〉を連載・再刊しうる「場」Ⅱメディア環境を通じてこそその現象であったことも確認する。

「第二章 「紋章」——事変下の〈日本精神〉言説と浪漫主義的自己遡及からの〈自由〉——」では、同時代の「日本精神」という流行言説と「紋章」のテキストの相互的關係を究明する。「紋章」において〈日本精神〉がどのように言及されているかを改めて確認したうえで、「紋章」の同時代すなわち一九三四年前後において〈日本精神〉論が展開していくまでの歴史的過程を辿りつつ、そのなかで横光の〈日本〉言説がどのように位置づけられるかを検討する。この歴史的な検証のなかで明らかになるのは、事変下のナショナルな

風潮のなかで〈日本〉をめぐる言説が文学者たちによって展開されていったことは自明なことのように扱われかねないが、その様相についてはけつして自明でない批評性を担保していた文学者たちの実態である。〈日本精神〉に関する同時代のイデオロギーを無条件に受け容れることなく、批評意識を持続し、相対化しようとした文学の一九三四年前後における一側面を、横光そして小林秀雄を通じて照らし出すことを目的とする。

「第三章 「欧洲紀行」——〈長篇〉化するテキストと〈日本〉のヒューマニズム的現前——」では、渡欧中の断片的な紀行文のテキストが一冊の本にまとめられる際に働いた〈長篇小説〉の力学を検証する。帰国後の単行本化に伴ってはじめて「欧洲紀行」内に〈日本〉の表象が顕現すること、またそうであるがゆえに同時代のヒューマニズム言説と交錯するかたちで現前していることを確認する。

「第四章 「旅愁」——一九三七年における「日本的なもの」とその先験への問い——」では、「旅愁」のうち『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』両紙に掲載された新聞連載分を中心として、渡欧中の通信文や小説「厨房日記」も視野に入れながら、一九三七年の「日本的なもの」をめぐる議論との同時代性を再検討する。「日本」をめぐる言説群はとりわけ満州事変以降に突出して目立つようになるが、二・二六事件とその判決を経た一九三六年後半から一九三七年の盧溝橋事件に至るまでに「日本的なもの」という言辞において流行を呈した。それらは満州事変以降の文芸復興期から、戦時下の近代の超克のテーマへと、それぞれに通底する論理的連続性を内包しながらも、しかし一線を画すような一九三七年特有の現代性<sup>モダンテイ</sup>を形成していたのであり、文学者たちはその特殊性Ⅱ「新しさ」に着眼した批評や創作を展開していた。ある者は三国協定のコンテキストにおいて危機意識を抱き、ある者はロマン主義的思潮のもとに新しく可視化された国土と民族への「愛」を語った。そして横光の「旅愁」からは、ファシズムと人民戦線の衝突に揺れる危機のヨーロッパをその地で体験した作家としての観点による、「日本的なもの」が一方では棄却され一方では美化される同時代の論式に対して両面的に批評しうる表象の痕跡を辿ることができるのである。ここでも、横光が〈長篇小説〉で表象していた〈日本〉が、単にファシズムⅡ日本主義と連帯するものではなく、また保田や萩原朔太郎の〈浪漫〉的傾向とも通底しないかたちでの現代性の表出であったことを明らかにする。

### ● 第三部 戦中・戦後の〈長篇小説〉と〈日本〉言説の転回

横光にとって、一九三七年七月七日の「日支事変」（盧溝橋事件）は重大な転機となり、前部で検証したような〈長篇〉の在り方がもはや維持できなくなっていた。そこで第三部では、上述のような〈浪漫〉とは異なる〈長篇〉が、戦時下においてどのような〈日本〉表象の転回を果たしたかを検証する。

「第一章 「旅愁」——戦時下における「世界史」との交錯——」では、日中開戦後に連載が再開された「旅愁」の「続篇」、および『第一篇』の単行本化に伴う改稿過程を検証

し、突如として介入した「東洋」という視点の内実を探る。新聞連載時の「矢代の巻」に見られたはずの日本対西洋という構図が、日中戦争の影響のもとで東洋対西洋の構図に敷衍されるプロセスを検証し、その主要因と考えられる「世界史」の視座と「旅愁」との相関関係について考察する。

「第二章 「旅愁」——アジア・太平洋戦争下における「座標軸」の転換——」では、前章で確認したような〈東洋〉〈西洋〉という思想的枠組そのものが、アジア・太平洋戦争の開戦という局面において失効し、「古神道」と「カソリック」の対峙という主題へ転回していった過程を確認する。「旅愁」のテクストが第二次世界大戦の開戦やアジア・太平洋戦争の開戦に遭遇した過程を辿ったうえで、「古神道」がどのような文脈で援用されているかを分析し、それが援用されるに至った前提として考えられる「カソリック」という問題を前景化することにより、「旅愁」における「古神道」言説の脱中心化を図るものである。

「第三章 「夜の靴」——最後の〈長篇小説〉とその「真一文字」の〈日本〉言説——」では、本論の締めくくりとして「夜の靴」に至る以前に書き継がれた横光の〈日本〉をめぐる〈長篇小説〉の来歴を視野に入れながら、「夜の靴」に見られる〈日本〉表象の読み直しを図るものである。従来この作品が戦後の問題圏のなかで捉えられる傾向にあったのに対し、戦間期および戦時下との接続のなかから再評価することをその目標とする。

以上の通り、本論文は一九三〇・四〇年代の横光利一の文学とその同時代を通じて、戦間期から戦中・戦後の日本近代文学における、〈日本〉をめぐるメディアとテクストの展開の一面を明らかにするものである。

● 附録 新資料紹介——『定本横光利一全集』未収録作品——

最後に、本研究のなかで発見した新資料の翻刻と解題を附録として載せる。いずれもこれまでの横光研究において報告のなかったもので、本研究が対象とする戦間・戦中期の資料として価値の高いものと思料し、ここに附録する次第である。